

大分，今日も元気です

大分県 大分大学教育学部附属中学校 3年

佐藤 千慧（さとう ちさと）

ガッ，ガッ。寝ている私の体の芯を突き上げるような揺れ。「ピーピー，地震です，地震です」緊急地震速報が追い打ちをかけるように，恐怖心を駆り立てる。もうやめて，と何度も何度も心の中で叫んだ。

熊本・大分地震から，約四か月が過ぎようとしている。体から，やっと揺れの感覚や，耳の奥でくりかえす，緊急地震速報は鳴り止んだ。しかし，その日々の中で，日に日に大きくなっていくものがある。それは，四月十四日の熊本・大分を地震が襲った，次の日の出来事だ。

「お一人様，一つまでとさせて頂いております」「一家族様，お一つまでです」そんな言葉が飛び交う。朝一番，普段はすいている道も，車で埋め尽くされていた。みんな，必死だった。今夜も地震は来るかもしれない，という底知れぬ恐怖を相手に，必死になっていた。そしてまた，私もそのうちの一人だった。姉と買い出しに来た私は，まずは水を確保するように，と言われ，販売コーナーを目指した。そこで，私が見たものは，目を光らせて我先に，と水をカートに入れている人々だった。お店の人が，次から次へと在庫を出しているが，陳列よりも，陳列棚からなくなるスピードの方がはるかに速かった。「すみません，今日の在庫はこれまでにになります」その言葉を聞くと，群がっていた人々は早足でさっさと退散していった。

「どうしようか…。」

小さく，ため息交じりに腰の曲がったおばあさんがつぶやいていた。人だかりの中，このおばあさんが，水を買うことができなかつたのだろうと，容易に想像できた。しかし，私の腕の中には，一つのペットボトルしかない。家族のために必要な一本。だから，簡単にはこれどうぞ，とは言えなかつた。悩んでいる私の横を大学生くらいの男の人が通り抜けていった。彼が行った先には，あのおばあさんが。

「どうぞ，俺，ほかの店行くんで。」

そう言って何のためらいもなく，おばあさんに水を差し出していた。

「ありがとう。腰が悪くて，やっと歩いてきたんだけど，水も買うことができなくてね。どうしよう，って思っていたんだよ。助かったよ，本当に，本当にありがとう。」

おばあさんがほほ笑むと，男の人は照れくさそうに，人混みの中に消えていった。

ほんの数秒のこの出来事が、私の中で日に日に大きくなっている。

私は、この経験を通して、私自身は、自由に歩いたり、逃げることができる。しかし、見渡してみると、出会ったような、腰の悪いおばあさんや、杖を使って歩いている人、車椅子に乗り、膝にかごを乗せて買い物をしている人も知った。このような人は、地震の時私以上に、どこに逃げたらいいのだろう、停電して、足元が見えない状況で、不安で、立ち尽くしてしまうのではないかと、思った。自分も危うい状況、恐怖はあるけれど、その中で、私の出来ることは、避難所に行く際、隣の家のおじいさんとおばあさんに声を掛け、隣を寄り添いながら、歩幅を合わせ、歩くこと。避難所で毛布を配る時に、ただ配るだけでなく、笑顔も配ること。できることは限られているけど、前向きに行動することが、その限界の壁を少しでも壊していける、と私は考えた。

「ここどうぞ。」

「ありがとね、その気持ちがとてもうれしいよ。」

四月の地震は、決して無駄にはしない。地震を経験したことで、私は学んだ。先日、私は初めてバスの席を譲った。きっと今までの私なら、迷いやためらい、わざわざ自分から関わりに行く事はないだろう。行動に移すことはなかっただろう。しかし、四月十五日の経験が私を後押しし、自分から、積極的に関わりを持ち、行動に移すという選択肢を選ばせた。実際に行動してみると、日常生活で生かしていけることは、たくさんあるのだと実感したし、自信がついた。そして何より、私が席を譲ったおばあさんの柔らかい笑顔は、私の次の行動への力と、勇気をくれた。

四月十五日。この日は、私の人生の大きな分岐点となった。災害は自然が相手のため、止めること、人間が太刀打ちすることはできないかもしれない。しかし、対策をとること、人と人とが手を取り合い、心を寄せ合うことはできると学んだ。今回の地震の風評被害で、温泉県である大分は、一時はキャンセルが相次ぎ、にぎやかだった観光の通りは、静かになった。しかし、そんな地震に負けないくらい、温かい人が多い場所、心が休まるほっこりできる場所、笑顔のパワーがみなぎる場所、それが大分県。大分、今日も元気です。